

# カルシユの足跡を追って

◇16◇

若松 秀俊

フリッツ・カルシユ博士のための研究資料として書いた。その書が『ハルトマンの哲学』(長屋)と共著、中文館、一九三七年)である。さらに、『ドイツ理想主義の時代

』(ドイツ理想主義の時代)と共著、中文館、一九三七年)である。さらに、『ドイツ理想主義の時代

』(ドイツ理想主義の時代)と共著、中文館、一九三七年)である。さらに、『ドイツ理想主義の時代

## 学問と著述

(上)

そのうち千紙ほどは、

父フリッツの肉筆の特徴を知っている彼女が解説したが、そのメモの脈絡はほとんど不可能である

筆者はこれを何とか解分と共通の師であったハルトマンの思想を著わす

後マルブルク大学で学

び、後にニコライ・ハルトマンに師事した。彼はポール・ナトルフおよびルドルフ・オットーとともに、同大学哲学科の大スター教授といわれた傑出した人物である。ハルトマンは、本邦において昭和期の哲学者に少なからず影響を与えてい

# 1万5000ページのメモ残す

の理性的リアリズムの代表的人物、クリストフ・ゴットフリート・バルデア

研究により、一九三三年に哲学博士の学位を授与

シユタイナーの影響を受けたカルシユは後に、

『ヨーロッパ文明の没落』の著書で有名なシュ

ペンクラート同様に、根

Unter dem Rektorat  
des Professors der inneren Medizin Dr. Alfred Schwentenbecher  
verleiht die Philosophische Fakultät der Universität Marburg  
durch ihren Dekan  
Dr. Rudolf Wiedtich, Professor der Geologie u. Palaeontologie,  
**Herrn Fritz Karsch**  
aus Dresden-Bischofzig  
auf Grund seiner ausgezeichneten Arbeit:  
Christoph Gottfried Bardis,  
der Vertreter des logischen Kritizismus in Schüler des deutschen Idealismus  
und auf Grund seiner sehr gut bestandenen mündlichen Prüfung  
**Titel, Rechte und Würden  
eines Doktors der Philosophie.**  
Vollzogen zu Marburg am 12. April 1923.



Alumni-Verband

哲学博士学位記 (1932年)

つものが他を滅亡させることなく共存している日本の文化のありようは、世界中の識者の注目するところであると語っていたといふ。まさに、今日の世のありさまを、年代を含めて的確に予測していた。

このことは、混乱の時代に生きるわれわれにとって実に驚くべき洞察力であり、これらの講義内容を五期理乙生の酒井勝郎が記録にとどめていく。また、日本を離れるに際して、カルシユが生徒に語ったことを印刷物として、ドイツ語の文章で自ら残しているのは、極めて興味深い。

次回からは二回にわた

って、憎越(せんえつ)ながら筆者の理解した範囲内、カルシユ博士の学術業績と思想の一端について述べてみたい。

(東京医科歯科大学大学院教授)

文中敬称略